



田原さゆり 建設部門（建設環境）

勤務先：株式会社 建設維持管理センター

先日も出張先の旅館で「どんなお仕事なんですか？」と聞かれました。40代半ばの女性が作業服、日焼けした素顔、無造作に束ねた髪、という姿で現れるのだから当然でしょうね。「私の仕事は〇〇です。」と、ひとことで説明するのは難しく、現場を1日中歩き回って疲れた身体には少々つらいなぁと思うときもありますが、興味を持って聞いてもらえるなら喜んで解説してしまいます。現在は、川に棲んでいる生き物（動植物）が、どこでどんなふうに生活していて、どうすれば彼らと人間とがうまく共生していけるのか、ということを探ったり考えたりするのが私の仕事です。大学では分析化学を学び、社会人になってからは食品分析のほか水質・底質・大気等の分析業務に従事していました。川の生物と戯れるようになったのは、30歳を過ぎてからのことです。もともと自然や生き物が大好きだった、というわけではなく、虫全般やニョロニョロ系の生き物は昔から大の苦手。それでも調査の現場ではどういうわけかパチッとスイッチが入り、藪こぎ、クモの巣にも動じ（てはいられ）ないでずんずん進んで行けるから不思議です。自然は奥が深くて教えらるることばかりだし、調べれば調べるほどわからないことが増えていきます。その面白さにすっかりはまってしまいました。当面の課題は、堤防を駆け上がっても、重い道具を持って歩いても、息切れしないように体力を維持すること、でしょうか。（ふう〜）



次号は、佐伯礼子さん（建設部門）



島田 昭三 農業部門（農業土木）

勤務先：サン技術コンサルタント株式会社 s-shimada@sun-ohk.co.jp

雑踏の東京から牛の頭数の方が圧倒的に多い根釧原野へと職場環境を移して、32年が経過している。私は東京都建設局の職員として、中小河川改修事業に伴う計画、設計及び工事監督に従事していたが、シビルエンジニアとして直接、ものづくりに携わっていた願いと人生の節目である結婚が重なり、「1973年（昭和48年）」広大な北海道にて農業土木技術者として生きる決意をした。

立場が変わり、ゼロからの出発は公務員時代に想像していたよりも、はるかに厳しい職場環境であった。その事例を挙げると①仕事の確保に多くの時間が費やされた②人的資源の確保に苦慮した③苦境に立たされると優遇されていた時代に戻りたい衝動に陥った。これらの課題を払拭するため、強靱な体力と人の価値を軽々に評価することはできない、という信念で自ら手本を示し、従業員の教育にあたった。この結果、気がついてみると多くのライセンスを取得していた。この中の一つが技術士である。

最近、ニートなどの言葉が流行し、この対策に政府は苦慮しているが、若者は自分探しをしすぎてはいないか。知識、経験不足で努力をしない若者が理想を求めても、あまえの範疇を越えていないと思う。

農業は循環型産業であるとともに総合的な知識、技術が必要である。しかし、現状は農業系の大学、専門学校卒業生が、農業経営者になっていないことを危惧している。今後は若い技術者に、体験を通して得た知識、技術を伝えつつ、自己研鑽につとめていく所存である。



次号は、橘 邦彦さん（建設／総合技術監理部門）